

昔の火事

宮本百合子

青空文庫

こちららは、タオルがスフになったばかりでもうだつがあがらないが、この頃儲けている奴は、まったく思いもかけないようなところで儲けてるんだねえ。理髪屋の親方の碌三がそう云い出した。中学校や女学校の試験が新考査法になって、いっとう儲けたのは誰だと思うね。頭をいじられている猛之介は、白い布をぐるりとかぶせられて目をつぶりながら、曖昧にゆるい入れ歯をかみ直して、ふうむと云った。いっとう儲けたなア歯医者だそうだぜ。齲^{むしば}歯一本について一点ずつひくんだそうだ。だもん、どの親でも躍起となるね。何かでチヨイチヨイと埋めてさえありや引かないんだそうだから、歯医者には繁昌して、夜まで子供で一杯だ

つたとき。大分儲けたそうな話だ。これから毎年となりや、一身上は忽ちだ。胡麻塩の頸筋のところを茹られている窮屈そうな声で猛之介は、まあ、それもよからうさとゆつくり云った。日本人の齒がみんな丈夫になつていいかしんねえ。それから大分間において、猛之介は、いかにもこの日ごろ考えているらしい口調でこう云った。だがまあ、金^{かね}なんというもなあ、儲けさしてくれるんか分んねえようなどころもあるもんだ。時世時世で、金があつちからころがりこんで来るつてこともあるもんで、その道に居合わせた者は、運がいいというだけさ。——遠慮して素通りさせるがものはねえ。理髮屋の碌三は、鋏を鳴らしながら後つきの工合を眺めていたのだが、成程ねえ、と感服したように唸つて、やが

て、ハツハツハと苦つぽい笑いかたをした。理窟はそれぞれくもんだ。

碌三も猛之介も、近頃新市街に編入されたばかりのこの土地では生えぬきで、若衆仲間からのつき合いであつた。土地もちの連中があつまつて、村から町になつたとき、土地整理組合のようなものをつくつた。新市街に編入されたというのも、近年こつち方面へ著しく工業が発展して来たからで、麦畑のあつちこつちに高い煙突が建つた。大東京の都市計画で、この方面一帯が何年か後には一大工業中心地になるという話がある。土地整理組合というものもこの見とおしに立つて、土地もちが会社やそのほか土地を買いおうとするのに不当な懸引をされないよう、その反面には地主の

間に利益の均等を守ろうというわけで作られたのであった。

碌三も祖先代々の麦畑をもつて、猛之介も祖父さま譲りの土地をもつて、組合が出来るときから入っている。猛之介の土地は、つい近頃一町歩まとめて或る会社に売れた。事変以来地価はあがるばかりだが、特にこの半年ほどは、稗の片っ方へ何がどつさりと載ったのか、価はピンピンとつりあがつて、組合での地価も、初めの頃から見れば三倍ほどにはあがった。その価で一町歩売ったのが猛之介である。

碌三の地面は二町歩ほどであるが、割がわるいところにあつた。土地が小さくいくつにかわかれて散在している上に、小さい沢に向つて、この頃は乙女椿などが優しく咲いている藪になったとこ

ろもある。大体が、道路から奥へ入りすぎていた。だから、土地と一緒に必ず道路を問題にする会社関係は、この奥へは手を出さない。坦々たる広い改正道路が新しく出来て、その左右には昔の街道の名残の大福餅屋、自転車屋などが、櫛の太木の蔭や苔のついた藁屋根の下に店をひらいている。碌三の理髪店も昔から在るそういうこの土地らしい床屋の一つで、大福餅屋の店と同様、案外やって行けている。昔は街道往来の馬車挽だの、野菜車をひいて東京へ近在ものを売りに出る若衆を相手にしていたこれらの店へ、この頃入って来たのは、会社のマーク入りのカーキのジャム・パーに、作業帽をかぶった若い者たちで、歩道のところでキャッチ・ボールなんかしていたかと思うと、碌三の店をのぞいて、すい

ているとふらりと入って来たりする。国防色の平べったい袋をいつか鏡のところへ置き忘れて行つた若いのがあつた。財布でもなしと、碌三が白い上っぱりの裾で手を拭いて、そつとあけてみたら、それはピンポンのラケットであつた。五十八になっている碌三は、それを眺めながら、何か沁しみ々じみと今の若い者の生活やたのしみが自分たちの若衆時代とちがつて来ていることを感じ、羨望とも、哀感ともつかない気持で暫くラケットをひっくりかえして見ていた。

景氣に波がある。このことは、碌三の頭をはなれないことである。同じ土地整理組合に入つていても、所有地が裏だつたりいろいろの不便な条件にあることはやむを得ないとして、整理組合が

そこいらまで道路を開鑿かいさくしたりしないうちに、今のこの景気の波がすぎてしまいやしないかという不安は、絶えず碌三の念頭にある。碌三にとって、猛之介がもったいらしく述べるような金儲けの哲学も、つまりは持地が三倍もの価でうれた当今の人間の腹からこそひとりで出るおく暖ひのようなものだ、余りいい気持でもきけないわけである。

ふいと興醒めたような気になって、碌三は鋏の音たかく、二三カ所仕上げのようなことをし、まあ、こんなところかね、と、椅子をはなれて、バットの箱へ手をかけた。弟子の良太が白い布をとってやると、猛之介は伸びをするように手脚を張りながら、洗面台の方へ行った。

丹前のふところ手で、苳りたての頸筋のあたり、剃りたての顎のあたりに軽い風をうけながら猛之介は改正道路を、うちの方へ横切った。荒物屋の日除けの鉄棒のところへ何か下っていたので見ると、それは夜間英語教授という広告であつた。昼間働いて夜だけ勉強したい方は、僅の時間で英語の進歩する教授を御利用下さい。その荒物屋の家内は猛之介がよく知っている。英語なんかやる人間はない筈だ。そうしてみれば、誰かがたのんで、ここの店先へ札を出して貰っているのだろう。誰も、彼も、その向き向きで儲けようとしている、と猛之介は考えた。そして、それは極めて当然のことと思えた。儲けられるところをいくらかでも儲け

ないものは要するにうとい人間だし、そのたのしみがあつてこそ、人間は動いているのだ。

身代を大きくした猛之介の祖父さんの由兵衛という男は畦の由兵衛という綽名で呼ばれて生涯を終った。自分の田の畦、畑の畔から野良道へ出るとき、由兵衛はいちいち草履の底をこそげて一かたまりの土でも自分の家の土を、どこのどいつでも歩く道へ持ち出さないようにした。田の土、畑の土、それは金と汗のかたまりの土、往来の泥とはまるでちがう財産ということを由兵衛に子供のうちからきかされて育った。ひどく擲なぐられるのは、いつもうつかり藁草履の底をこそげずに、畑から道へとび出したときであった。

時代が變つて、草履の裏につく土さえ外へ持ち出さなかつた心がけとは反対に、今は、ふつくりとした武蔵野の黒い土の厚みを、二重に剥がして、土からの儲けを考えるようになって来ている。猛之介はこの知慧については自分に満足を感じている。土地を売買するときには面積を云つて厚みを云わないところに、猛之介の目がついて、今度昭和合金との間に話がはじまりかかると早速そこへ人夫を入れて、表面の土をならし一間ぐらいの深さにこそげとつて、その下のかたい赭つぽい土のところで、一町歩売りわたしの契約をした。猛之介は、こりや双方仕合わせでした、と云つた。あんたの方も重い機械を据えつけなさつて、じき土台がめりこむような畑土じやこまるだろうし。

こそげた土は、鮮人人夫が毎日働いて、敷地のずっと西端れの沢の近くの凹地へ運んだ。売れた土地はこのようにして地下げされ、売れない方の土地はこのようにして地上げされて、やがては買い手のつくようにされたのである。地下げしても、昭和合金の敷地は改正道路と全く水平だし、昔は一帯の小高い丘陵をなしていたその辺を開鑿して通してある道路の方から登って来れば敷地の端れはそれでもなお、大人の身丈より高い位置に、地層の断面を見せてはいるのであった。

マールブル荘という窓枠の桃色ペンキで塗られてあるアパートの新築工事を少^{しばらく}時立って見ていて又ぶらり、ぶらりとかえりながら、猛之介は余り浮かない気分である。けさの新聞に、凄^{しみ}い土地

の暴騰として、事変前の十倍に上ったという地価のことが出ていた。それに比べれば、昭和合金へ売った地面は寧ろやす過ぎたようなものだ。整理組合がなまじつかあるものだから、どうも個人として腕いっぱいの仕事がしにくい。役員の過半が、奥手へ土地をもっている連中なのが、やはり暗黙に邪魔しているとも思える。遠慮して素通りさせるがものはねえ、といった心の底にはわが身の前を素通りしているものがあるという気持からだったのに、碌三にまで勘ぐられたのは心外であつた。

西北の一角を切りくずしてしまえば、それで昭和合金へ売った土地の地下げは終るといふ日のことであつた。裏の苗畑につかう

堆肥のところにいる猛之介を、女房のセキが表の方から、父さんどこけ？　とうるさく呼びながら、さがして来た。そういうとき猛之介は決して、ここだぞウと返事はしない。縞の前垂をかけて小さい丸髷に結ったセキが、ああなアんだ、そこけ、と近づいて来るのを猛之介はこちらに立つて見据えていたが、セキは又どういうものかきようはいつものように顔の見たところから大声でがなって来ず、すっかり猛之介のそばへよるまで黙っていて、しかも四辺を憚る気配で囁いた。昭和合金さ売った地面から、何か出るんだとよ。人よせが始まるとよ。――おら始めて今聞いたが。

顎をひく表情でそれをきいていた猛之介は、黙ったまま大きく

両方の掌をうちあわせて塵を払うと、そのまま畑から出かけた。

行つてみると、注進どおり合金の庶務という男と、請負の現場監督と、人夫頭と、ほかにこれまで見たことのない洋服の若い男が三人、もう地下げの済んでいる地点にかたまっている。紺の服を着たおとなしそうな若い男が、そこから拾つて来た枝の先で、地べたの上をさしながら何か説明している。猛之介の現れたときにはそれが殆ど終つて、庶務の男が、ふーん、そういうものだとは知らなかった。こんなにかたまつてあるのは珍しいんですね。いや、きつと承知しますよ。飯島君、事務所の方からかかつてゆけば、こっちは秋ぐらいになるんだらう？ と、何かその若い男の肩をもった調子で云つているところであつた。飯島も、おだや

かに、さア、秋まではどうかしらんが、夏いっぱいは大丈夫ですよ。それに大体こつち半分は庭になるんだししますからね。そう返事をしている。

猛之介は人々のその輪の間へ、や、と頭一つ下げてわり込んで行つた。そして、目をはつきりさせようと二つ三つ瞬きをして、そこの地べたを見下した。何もほかのところと変つたことはない。もし変つたところと云えば、枝を手にもっている若い男の足許のところ、赭土を区切つて一間四方ぐらい畑土が黒くつまつた場所があるが、そんなところはこの地下げが始つたときからあつて、こう見わたしたところ、敷地全体にちらばつて二十や二十四五カ所、色ちがいのところはあるのだ。

用心ぶかく沈黙を守っている猛之介を合金の庶務が、その若い背広に紹介した。猛之介は、おとなしそうな若い男の顔へ、力のこもった視線を凝^じつと注ぎながら、何があるんですかな、と訊いた。豎穴が発見されたんです。この新しい黒土がつまっていると。ころですね。ここに、大昔、人間が棲んでいた豎穴があるんです。若い男は人のいい嬉しそうな笑顔で、実に珍しいんです、このように聚落をなしているのは。と云うのであつた。ふーん。じゃ、あつちのもみんな、その穴ですね？　そうですね。功労者は、この小関君です。というのを見れば、それは中学の帽子をかぶつた十六七の少年で、これも笑いひろげた口元が血色のいい頬つたを無邪気に盛り上げている。穴からは何か出ますかね。それは、

発掘してみなければ分りませんが、土器は確に出るでしょう。淡白な答えて、猛之介に何となくその先の質問を出しかねさせた。猛之介のききたいところは、その土器というのは金目のものなのか、そうでないものか、という点なのである。

一団は、あちこちで掘りかえされている赭土の地肌から陽炎かげろうのたつ日向をゆつくり歩いて、改正通りの方へ出た。バスへのもる迄注意していたが、洋服連の話は呑気で、大森の貝塚がどうのこののというようなことばかりであつた。

猛之介は、むずかしい顔つきで下唇をつき出しながら、独り又敷地の方へ戻つた。モッコをかついだ人夫の往来を漫然と眺めながら、落付かない気がした。猛之介は氣を引くように人夫頭の吉

永に向つて、ふん、物好きもあつたもんだね、いくらかになるんかい、土器とかを掘り出して、と云つてみた。研究だろう、大学の方の連中だつてえもの。これもあつさりした返事である。

じろりと吉永に一瞥を与えて、猛之介は敷地の外へ出た。どうもこいつも、はぐらかしたような返事ばかりする。吉永だつてわかるもんか、初めつからあすこにいたからには、うまい話なら一丁のつていない筈はない。本当のことなんか云うものか。若し一文にもならないようなことなら、あんなに皆うれしそうな光った眼をする筈はありつこないのだ。これが猛之介の信念である。整理組合のガラス戸越しにのぞくと、役員の中では一番年配の岩本が、ぽつねんと一人で外を見ているところであつた。猛之介

は、どうだね、いい話はないかね、と云いながら入って行つた。岩本はすこし耳が遠いので、その挨拶には答えず、どうしたね、何か用かねと、新聞を片よせた。そこで猛之介は、昭和合金の敷地に堅穴が出たこと、そこから土器が出るらしいことを話した。へーえ、あすこからそんなものが出るのかね。じゃあ、よそこもあるかしんねえな。ふむ。土器なんてもな、どうなんだね、金になる代物かね。さあ。——とにかく博物館にや多分そんなようなもんも納めてあつたな。

猛之介は、何んでもない世間話をして、そこを出た。博物館にも納っているとすれば、いずれ何か曰くはある物に相違ない。わるくひとにさわがれてしまうと工合がよくない。家へ戻るとセキ

が、声をひそめて、お父さん、何だったね、とよつて来た。猛之介は例の見据えるような見かたで女房を顧みながら、何か研究で、穴を掘るんだとよ。檜の木の下の肥溜めに向つて放尿しながら答えた。

敷地のぐるりがトタン塀で囲われた。職人の掛小屋が出来た。真先に門の横の番人小屋が出来はじまつて、建築が着手される一方で竪穴の発掘も進行した。天気さえよければ朝早くから夕方まで、例のおとなしい顔の若い男がやつて来て、人夫を指図し、自分でも泥んことなつてかたい古い赭土の表面へ黒い布をはいだようなどころを掘っている。中学生もよく来た。あらまし人夫に黒

土を掬い出させたあとは、この連中が軍手をはめた手に園芸用のシャベルをもつて、用心しいしい深さ一尺ぐらいで長方形をしたその穴を掘りおこして行くのである。こわれたりしては困るものが底に埋っていることは、若い者に似合わないその仕事ぶりの細心な根気よさでよく判る。

猛之介は、ぶらりと来かかったふりをして一日に幾度か仕事場へ入りこんだ。そして穴の成りゆきを観察し、掘っている連中の手元を監視した。骨董は天井知らずの価になって来ている。この間も、支那の骨董を種に何百万円かの詐欺がばれたことが新聞に出ていた。土器と云えば、かわらけの類だろう。そんなことを云ったって剣ぐらいは出るかもしれない。猛之介はそう思って、見

ている。

丁度、竈穴の一つに、竈だかまどというものが掘り出されたとき猛之介は居合わせて仔細に見届けた。穴の北側の壁の真中辺を掘っていた中学生が、オヤ、と叫んでシャベルの手を止め、井上さアーンと、もう一つの穴の中にかが跳んでゐる若い男を呼ばわった。ちよつと！ 何かあるらしいですよ。焼けた粘土が出ましたよ。すると井上という男が駆けて来て、そう、竈かもしれない、変に声のなんだような調子で云うと、二人は物も云わず、シャベルと手で土をとりのけ始めた。殆ど昼からじゆうかかって二人が掘り出したのは粘土で厚くかためた焚口の、火床から外へ煙出しの通じた一つの原始の竈であつたが、井上は、そうやって猛之介が飽き

もしないで見ているのを、面白がって眺めていると思ったらしく、いかにもよろこびを共にわかとうとする笑い顔で、こんなに完全な形で竈がのこっていることは珍しいんです、と額の汗をシャツの腕で気持よさそうに拭きながら云った。ここに、ホラ、底のぬけた甕がさかさにしておいてあるでしょう。これは竈で炊事するとき甕の台につかったものですね。こんな時代にも、やつぱり廃物利用をしたんですね、と笑った。竈の前の踏みかためられた赭土のところを手で払うようにして調べて、井上は、ある、ある、ね、と中学生に示した。これが粃と藁の圧痕ですよ。この豎穴の時代にもう農作がされていたんですね。沢の方に水稻をつくっていたのかもしれない。

尻っぱしよりになつて跣みこんでその地点をのぞいていた猛之介の心には、一種の失望とともに侮蔑に近い感情が湧いた。なーんのことだ。大昔の百姓の穴小屋をほじくりかえしているのか。そんなら、大したもののは出つこない。今だって東北のひどいところへ行けば、土間に藁をしていて寝ているという話だ。そんなところから、金めな代物なんぞ出ようもないことは知れきつている。猛之介は穴から外へ出ながら、どれもあらかた同じようなものですかな、と云つた。剣だの何だのというものは、ここいらからは出ないかな。すると、井上はそういうものが出るのは、貴族の古墳ですね、と答えた。それに、西の方では鉄や銅をそろそろ使いはじめた時分に、関東はまだずっとおくれていて、やっとなすこし

鉄の端を刃物につかったりしているところも、歴史上なかなか面白いですね。

しかし猛之介は、興ののらない表情で、翌日は竪穴のまわりへその姿を現わさなかった。あの様子でみれば、研究というのは本当だったのか。柱穴が幾つあるとか、溝がどうのと、物見を立てて写真をとったりする、それだけのことで格別の魂胆もなかったのか。そんなことを考え考え、煙管をかみながら猛之介が苗畑を見まわったりしているとき、昭和合金の敷地へは、別の見物人があらわれた。噂をききつたえた附近の小学生たちがかたまつて、トタン塀の外から、何処から入れるんだい？ あつちだよ、あつちに門があるんだよ、などという声々を響かせながら入って来た。

いつも、大抵は男の子たちで、やや暫く黙って井上たちのするこ
とを眺めていてから、ぽつり、ぽつり、それ何だろ、というよう
な質問をはじめ。

井上は、小学生の見物があらわれると親しい調子で、皆、勝手
に掘ったりしちやいけないよ、と先ず警告を与えてから、いろい
ろ説明してやった。こんな皿は、こわれ易いんだからね。まだ上
薬がかかってないだろ。大昔の皿はみんなこんなのさ。工業はま
だすすんでいなかった証拠だよ。

一旦見てしまうと堪能すると見えて、同じ子供がくりかえして
来るということは稀である。なかに一人、鞆をどこかへおいてか
ら又やって来て、井上たちの引上げる頃までいる少年が、井上の

目をひいた。君、何年？ 五年。何ていうの？ 辰太郎。この辰太郎は無口で、だんだん掘る仕事の手つだいもするようになった。かえりのバスの中で中学生がふっと井上に云った。あの辰太郎って子ね、何だか寂しそうな子ですね、僕そう感じるな。服装は大してわるくないし、お八ツ時分、井上が角の大福屋へ汁粉をのみにさそつても、余りついて来ない。

この辰太郎が猛之介の孫で、養子であつた生みの父親は、財産のことで猛之介と大衝突して、七八年前家を出てしまつていることを知つたのは、もう夏に入ってからであつた。

ちぢみ
縮のシャツの背中を汗でじつとりにして、掘り初めの時分から

見ると、すっかり日やけのした井上が、夏の日永を一刻も惜むようにして働いている。辰太郎が運動パンツに跣足はだしでわきにくつついて、シャベルを動かしている。その頃には、竪穴はもう二十米以上掘られて、その一部は又土をかぶせて、新築の鑄物工場や、仕上工場の土間になっていた。けれども、今にえらい先生がたが来るのだからと云つて、柔らかな土間の上へ白い石灰で竪穴の形が鮮やかに描かれていた。雨のすくない夏で、樹木の一本もない敷地の赭土の反射は炎暑でもえるようである。井上も中学生も辰太郎も、余り暑気の激しいときは、仕事をやめて沢よりの藪かけへ寝ころんで休んだり、雨天体操場のような天井の高い仕上場の土の上へ菰こもを敷いて横になったりした。

辰太郎は何となし井上や中学生がすきになっているのであった。一粒種の後とりだから猛之介はこの孫を甘やかしている。婆さんや娘より、一段上のものという感じで見ていたが、辰太郎としては、一種の孤独の思いがいつも胸にあるのであった。じいちゃんと自分との間、おばあさんと自分との間、そして母さんと自分との間、どっちを向いても、何となくもの足りない淋しいものがある。井上は中学生も辰太郎も同じ仲間のようにして、特に辰太郎には、豎穴に関連していろんな興味ある産業の進歩の歴史の話をきかしてくれた。辰太郎は、この丘の上へ続々立ちはじめた極めて近代的な工場と、その土の中にある古代の生活の遺跡とを、おどろきの目で見較べながら、そういう話をきいた。

夕方、辰太郎がかえると、その刻限には大抵夕顔の棚の下の床
几にいる猛之介が、ふむ、きようは何が出た、ときくのであつた。
竪穴から何が出たかという意味である。辰太郎は、切れものの破
片が出たよ、とか、モモの核が出たよとか手短かに答える。自分
から、きようは馬の齒が出た、と云つたこともある。猛之介がそ
れを訊く氣持を辰太郎は知らない。この夏は殆んど毎日合金の敷
地で暮しているのに、叱りつけられないわけも知らない。猛之介
は、孫が我知らずそこで自分の代理の役に立っていること、何か
變つたものが出たとき、自分が知らずにいるようなことは無いめ
ぐり合わせになつて来ているのに満足しているのであつた。

工場の建築の方が愈々いよいよ捗どつて来て、この一週間ばかりのうちには最後にのこつた二つの竪穴を調べ、発掘の仕事も一段落をつけなければならぬ時が迫つた。井上は益々せつせと掘つて、休むときは先の頃のように只寝ころがつてはいず、仕上場の周囲にとりつけられた作業台の上に、これまで大きい木箱に入れておいた素焼の甕だの皿だの軽石だの、一つ一つこまかく何か書きこんだ紙を貼つたのを丁寧に並べる仕事にかかった。ボルトで締めた柱には幾通りもの図がかけられた。

一方ではそういう陳列をすすめながら、最後の小型の竪穴が掘られたのであるが、丁度人気ない手洗場の水道の蛇口へ口をもつて行つて水をのんでいた辰太郎は、辰ちゃん！ おやいないのか、

と云っている井上の声をききつけた。ね、確にそうでしょう？

火事があつたんだね。辰太郎は、走つてその穴のふちへ行つた。

井上は、ガラスの円い蓋つきの器を片手にもっていて、その穴の壁に沿つてついている焼灰の中から、こげたススキの一かたまりを、その器の中へそーつと入れている。辰太郎を見て、井上がこの堅穴ではどうも火事を出したらしいよ、と云つた。こんなに灰があるし、このススキなんかは多分屋根だったのが、燃えおちた跡なんだろうね。

火事のあつた堅穴。ここで火事が出た。辰太郎は何だか氣持が瞬間変になつたほど、ここに群れていた大昔の生活を自分の身に近く感じた。これまでは、云わば標本のように古びて動かない遠

方において感ぜられていた全体のこと、火事という活々と身近い出来ごとが、ここにもあつたときくと、俄にはつきりとした生活の息吹が通つて来た。どんなにみんなが騒いだらう。叫んだら、馳けずりまわり、稲の束をかついで逃げたり、どんなにみんながびっくりしただらう。その光景を思いやると、辰太郎は何だかひどく可愛そうになつた。火事だ、とどんな言葉で叫んだのだらう。そして、奇妙なことに、竪穴の面積が小さいか、みんなの体が今の大人よりは小さかつたように思えた。その小さい連中が、ここをあつちこつちへ駆けまわつたように、いつか見た火事の記憶から、その太古の火事も、沢のむこうの櫟林くぬぎがうす蒼く輝いてかすんでいる風のない月夜に、ボーと赤く燃え上つたと

しか思えないのであった。

感銘の生々しいつよさが、発掘の終ったこととも結びついて、辰太郎はその晩妙に悲しい心で眠った。或る朝目が醒めたら、いかにも夏の末らしい雨降りであった。幅のひろい雨がザアと降っている。すぐ、豎穴はどうしたろうと、辰太郎は思った。猛之介は、町会議員の補欠がどうこうということで朝飯をしまうと耳の遠い岩本と番傘をさして出て行った。小やみになったとき、辰太郎はゴム長で、開鑿道路のひどい泥濘の中を歩いて、昭和合金の仮通用門を入って行った。職人はペンキ屋が一人来ているきりであった。塗りたてのペンキの匂いのなかを、仕上場の方へ行つて

見ると、人っ子一人いない大天井の下に、大半が陳列されたままある。陳列の様子は、小学校の卒業式のときの陳列を思い出させた。どれも一生懸命、真面目に並べられてある。この陳列をそのえらい先生たちに見せてしまうと、井上は掘った豎穴をみんな元のように埋めて、もうここへは来なくなってしまうわけなのである。

辰太郎は外へ出て、先ず火事を出した豎穴のところへ行ってみた。穴一面に浅く雨水がたまっている。次、次、どれも長方形の池のようだ。辰太郎は、火事を出した豎穴のところへ来て立つて、永いことその長方形の浅い水の面に軽い雨粒が落ちてつくる波紋を眺めていた。やがて、何を思ったのかゴム長の爪先でまだそこ

に盛られている土の塊りの一つをそつと豎穴の空気の中へ蹴こんだ。そして、辰太郎は水の底から何か音のきこえて来るのをでも待つような眼色をした。

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第五卷」新日本出版社

1979（昭和54）年12月20日初版発行

1986（昭和61）年3月20日第5刷発行

親本：「宮本百合子全集 第五卷」河出書房

1951（昭和26）年5月発行

初出：「改造」

1940（昭和15）年4月号

入力：柴田卓治

校正：原田頌子

2002年4月22日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

昔の火事

宮本百合子

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>